

第五九号 (二〇一三年)

# 赤門柔道

赤門柔道俱樂部  
東京大学柔道部

### 三. 私の得意技

#### 飯田隆君を語る

昭和42年卒 元監督 藤網義行

##### (1) 飯田隆君を取り巻く環境

飯田君は昭和40年4月に東大に合格した。高校は兵庫県姫路市の淳心学院で中高6年間一貫教育のキリスト教をベースとする進学校である。体育系部活動は今では9部あるが、武道系は剣道部のみが存在し、柔道部は無い。彼は柔道については高校時代に少し習ったのだが、本格的には修得せず、東大へ入ったら柔道をやりたいと常々考えていた由。そのような次第で、飯田君は東大入学後直ちに柔道部へ入部した。(この事情は淳心学院の1年後輩の西澤君、前田知君も同様であった。)

##### 1) 七大学柔道のパラダイム・シフト

昭和39年10月の東京オリンピック柔道競技無差別級で神永選手がヘーシンの「袈裟固め」に敗れたことに発して、柔道界では寝技重視の声が澎湃として巻き起こり、旧制高校OBの方々が寝技復活に向けて七大学柔道部に働きかけを強化された。軌を一にして名大柔道部は旧六高柔道部師範の岡野好太郎先生を師範に迎えて寝技に特化・集中する稽古を開始した。昭和39年の七大戦では平井選手を除く全員が寝技に徹し、分け役は徹底して「亀」になるという防御寝技を展開した。しかし、この年は変わった試合展開をやることに注目が集まったが、強さはさほど感じられず、東大はこの流れに着目していなかった。しかし、寝技一本槍に精進した名大では翌40年には「寝技の抜き役」として鈴木省三、役田、二村、岩月選手らが成長し、七大戦で優勝するに至った。(東大は準決勝戦で名大に敗北を喫した。全く名大寝技に歯が立たなかったと言ってよい程の敗北であった。)一方で、名大と決勝戦を戦ったのは1年遅れで寝技に徹し始めた京大(伊藤吾希夫主将)であった。まさに七大戦でパラダイム・シフトが生じたのである。「守る寝技」から「取る寝技」への転換であった。換言すれば、「引分けの寝技」から「勝利のための寝技」への転換である。

特に、鈴木省、二村選手らが実行した「下から返して抑えきる」というコースの習得が抜き役には必須となった。また、それへの防御も守る側には必須となった。そして、名大を打倒するには「亀を取る技術」の習得も必須となったのである。

##### 2) 40年4月の新入部員

昭和40年入部組は1年生で七大学選手に抜擢された選手はおらず、6月の七大戦終了まではある意味でお客様扱いの時期を過ごしたと言えよう。しかし、新入生の数が多すぎるので5月の連休にあえて新入生歓迎合宿を実施して、立技、寝技の基礎訓練を徹底して行い、顎や手の甲を擦り傷だらけとするくらい鍛えて、それでもやる気のある部員が10~15人残れば良いと考えていた。大上君(天王寺)、今泉君(旭丘)、柘植君(湘南)、福地君(上野)らの経験者に加えて、飯田君(淳心)、大福君(愛光)、草野君(宮崎大宮)、上木君(熊本)、上原君(上野丘)、鮫島君(戸山)ら白帯組が残った。また、一橋大副主

将（昭和39年度卒、高校は富山中部）の林則清 OB も社会人経験後に東大へ入学し、柔道部へ入部した。この学年は、経験組の資質も良かったが、白帯組に体格、体力、運動神経の良い人材が多く、将来の伸び代が大きいことが魅力だと感じられた。（昭和40年の赤門柔道第12号では新1年生は26人が登録されている。）

### 3) 東大柔道部の寝技シフト

昭和40年秋から東大の3年生以下の新チームは七大戦に優勝するために「寝技に徹することと方針が変更された。（この詳細は赤門柔道誌第50号（2004年）に示野一雄元主将が「我らが時代」として執筆しているので参照ください。）

この数年、東大では故佐伯先輩（松山）、故藤岡先輩、故今井先輩、故博田先輩（六高）、故城野先輩（八高）、故湯本先輩（松本）他の多くの大先輩から高専柔道の神髄を教わってはいた。しかし、そこそこに使える程度にとどまっており、これらの技で勝ち抜くという強い意志の下に自らを鍛えこむという意識を持つまでには至っていなかった。取る寝技へシフトするという事は、技術面のみならずメンタル面でも「稽古で必殺のコースを確立すること」を決心し、絶え間なく努力することを意味している。

昭和40年秋の初頭の稽古は寝技の基礎訓練が中心となった。得意の抑えこみを完成すること、得意の（上からの）攻撃コースを習得すること、攻防に必須の（下からの）返し技を修得すること、亀取り技を習得すること、立技から寝技への移行技を習得すること、などが攻撃的寝技の達成目標となった。部全員が習得すべき基礎的技術と考えられた技は捨て稽古、寝技打ち込みで反復練習による訓練が徹底された。特に寝技の打ち込みは湯本先輩のアドバイスで（引き込み姿勢からの）帯取縦返し、帯取横返し、横帯取横返し、下からの十字逆、上からの馬乗り姿勢からの突っ込み締め⇒十字逆、後ろについての回転縦四方、後ろについての裏三角、などの技を左右10本ずつの打ち込みで徹底して稽古した。又、誘導技としては巴投げ、帯取り縦返し、帯取り横返し、腕返しを捨て稽古で鍛えこんだ。この反復練習を徹底する中で、個別の技の名手が育ってゆくこととなった。また、立技で三段クラスの者が寝技をやるのであるから、立技で培ったスピード十分の寝技を東大寝技の特徴とすることも意識した。

この流れの中に飯田君たち新1年生も身を置くことになった。大上君、今泉君、柘植陽君らは攻撃的寝技を展開することが期待されたが、一方で飯田君ら白帯組はまず守備的寝技を実践することが期待された。

守備的寝技と言えば、

- |                      |   |           |
|----------------------|---|-----------|
| 下から足が効くこと            | ○ | （1年生～2年生） |
| 二重がらみ、亀は最後の砦として使えること | ○ | （1年生～2年生） |
| 引き込みから相手を返して抑え込むこと   | ○ | （3年生必達）   |
| 引き込み以外の寝技への誘導技の習得    | ○ | （3年生必達）   |
| 相手によっては抜きに行く力を付けること  | ○ | （3年生～4年生） |
| 後の先の投技（裏投げ、横車など）の習得  | ○ | （1年生～4年生） |

というステップがあり、攻撃的寝技が出来て、更に誘導技に習熟する選手が出てくれば、監督として東京学生柔道連盟の大会のレギュラーとして使うつもりであった。

## (2) 飯田君の成長と戦績

### 1) 2年生の飯田君のスピリット

赤門柔道誌第13号(S41年)に2年生になった飯田君の寄稿「初心より柔道を始めて」が掲載されている。少し引用してみよう。

「銀杏並木の若葉も生き生きとして、すっかり緑に包まれた駒場の道場に新入生を迎え、上級生の自覚がいやがうえにも増してくる。それと同時に、まったく初心者同様に入部した昨年の今頃を思い出さざるを得ない。(中略) 元来、自分は体が弱くて、その上神経質で狭量で精神的にもひ弱い。その為、何としてもそれを克服せねばと思って高校時代から関心を持っていた柔道を選んだのだ。練習は連日厳しかった。体じゅう怪我だらけで、精神的にも肉体的にも貧弱な私にとっては耐え難い日々だった。しかし、柔道を修養として自己に課した私は自分には負けたくなかった。(中略) 入部当初は、柔道は一つの手段であった。精神と身体を強固にするものなら、それは何でも良かった。しかし現在、柔道は私にとって掛替の無いものになってしまった。私の願いとする精神の強固さも、身体の頑健さも、柔道に真に打ち込んで初めて与えられるものであろう。そう思うと私の迷いも去った。結局、私は中途半端な柔道部生活しかやらずに、柔道に対して期待ばかりしていたのだ。それからは、柔道と勉強とを学生生活の中心に置くよう努めた。度々自己に負けたが、それでも何か、自分の生き方に自信がわいてくるようになった。(以後省略)」

私自身、4年生でこの文章を読んだ時も、今読みかえしてみても、改めて飯田君の「二十歳の青春と柔道」に心を揺さぶられる。この気構えがあって、その後の彼の柔道と人間的な成長があったと思われるのだ。

### 2) 戦績

飯田君は(1)で述べた守備的寝技⇒攻撃的寝技へ進化した選手の一人である。白帯入部組では、鶴田君(42卒)、市橋君(43卒)、飯田君(45卒)、前田知君(46卒)、故須賀田君(46卒)らが続いており、最近では小宮山君(H21卒)らが伝統を受け継いでいる。「赤門柔道」誌、および「国立七大学柔道戦史」から飯田君の試合結果を抜粋しよう。

1年生：赤門総会1年生紅白試合で1勝1分、駒場秋合宿紅白戦2勝1分け、一橋大ジュニア戦1年生試合1勝1分、卒業生送別試合1敗(是松先輩)

2年生：赤門総会紅白試合先鋒1勝1分、東北・北海道遠征軍に参加1勝6分、一橋大ジュニア戦1引分、卒業生送別試合1引分(柘植健先輩)

3年生：赤門総会紅白試合1引分 慶応大七帝抜き試合1引分 日体大七帝抜き試合1引分、一橋戦練習試合1勝、先輩現役練習試合1敗(岡安先輩) 京大東大定期戦1引分(相手は亀谷)、西日本遠征軍(主務)1勝3敗3分、獨協大戦1引分、卒業生送別試合1勝1敗

4年生：七大戦 第1試合 阪大戦（五将）1引分（濱田）

阪大戦評：足を越えられず引分け第2試合 名大戦（五将）1引分（二村）名大戦評：続く飯田との試合では流石の二村もあの細くてごつごつした脚を越すことが出来ず、敢無く引き分けられる。

5年生：赤門総会紅白試合1引分（相手は南祇）、日体大七帝抜き試合1引分慶応大七帝抜き試合1勝1引分。七大戦 第1試合 九大戦（六鋒）1引分（相手は中堅・内海）九大

戦評：対するは飯田立って不利とばかりに徹底的に引き込まれる。内海寝技に応じ攻めるが足を制しきれずに引き分けられる。第2試合 東北大戦（六鋒）1引分け（相手は菊池）東北大戦評：得意のてっぽう功を奏すかと思われたが飯田場外にのがれ惜しくもポイントをのがす。決勝戦 京大（副将）1引分（相手は三将・三村）京大戦評：三将三村、飯田と対す。三村片足取りで倒され技有を取られる。京大陣固唾を呑むが以後三村よく頑張り時間切れ。

1年生～3年生まで着実に成長した飯田君であるが、その成長へ大きく貢献しているのは、隔年の東北・北海道遠征と西日本（近畿、四国、中国、九州）遠征であることが理解される。この遠征が行われなくなって久しいが、何とか復活できないであろうか？

### 3) 飯田君の寝技のスタイル

基本的に守備的寝技は右膝下の下袴部位を左手で握り、右手は相手の右襟から奥襟を窺い、左足裏は相手の右腰前にあてがい右足裏は相手の左肩、左腰、又は左膝裏にあてがって相手の動きを制する。2年生でかなりこの技術を成長させて、負けない飯田選手が出来上がってゆく。この時期を経て彼は攻撃的寝技へと成長した。上記の姿勢から相手を前に引き出して、自分の体を相手の下に潜り込ませることが出来れば、黒澤先輩の得意技「起重機」を放って、相手を右斜め前方に返してゆく。嫌って後ろへ下がれば草刈で後ろへ倒し、攻撃に転じる。42卒の鶴田君も得意としていた攻め口で、「起重機」が決まるときは2段巴投げに近い衝撃で相手は畳を背負うことになる。この技をベースに毎日の走り込みで脚と足を鍛え、東京教育大卒／当時博報堂（現東海大）の佐藤宣踐先生に対して5分近く下から守って足を越えさせず、佐藤先生をして思わず「立って来い」と言わしめたレベルに到達した。

この詳細は飯田君自身が語るのもので、飯田君の寝技のイントロダクション文の筆を擱くこととしたい。

## 寝技と私

昭和44年卒 飯田隆

### 1、はじめに

まもなく、東京大学入学・柔道部入部50年になる。この様な節目の時に、半生を振りかえる機会を与えていただいたことに、先ずもって、心からのお礼を述べたい。

### 2、寝技に打ち込んだ契機

私が大学に入学したのは、昭和40年で、前年の東京オリンピックで、ヨーロッパの寝技柔道に日本柔道が惨敗した直後であり、また、私が1年の時は、阪大で行われた七大戦で、東大は、鈴木省三選手率いる名大の寝技に完敗した。翌年は、七大戦は東大が主管校だったので、その年の秋からは寝技に特化した稽古を重ね、立ち技の稽古は、打ち込みもしなくなっていた。

翌年、東大の七徳堂で行なわれた七大戦で東大は完勝したが、事実上の決勝戦となった準決勝の東大・名大戦で、名大の主砲の巨漢岩月選手を封じたのは、東大の軽量60kgの鶴田六郎選手（昭42年卒）で、上から巨体を利して攻める岩月選手に対して、下から正対して足で守る鶴田選手、試合開始後6分間、殆んど動きはなかったが、力と力が攻めぎあう緊迫感はすさまじく、我々後輩は、「鶴田先輩頑張ってください！」と涙を流しながら見守っていた。鶴田選手は、6分間を立派に守り抜いて引き分けたが、その肋骨に大きな損傷を受けながらも頑張り抜いたのだった。

鶴田先輩の様な柔道をしたい。それが私が寝技に特化していった契機だった。

### 3、守りの寝技の形をつくる

柔道は、高校時代に少しだけで、大学で初心者同然の白帯ではじめた。1年上級の39年入学は、三段以上で入部した猛者が十数名いて、最初の1年間は、押えこまれて天井を見て過ごした1年だった。2年になって、どうしたら押さえ込まれないようになるのか、色々試行錯誤しているうちに、自分の右手で相手の向って左奥襟をもって徹底的に強く引きつけて、相手を固定させることが非常に有効と気づいた。そして、空いている左手で、相手の向って左足裾を掴み、その点でも、相手を固定させる。上から攻める者は、活動の自由度が大きく、有利に攻撃できる。この相手をいかにして固定させ動きを封じるかが、寝技の守りのポイントだと気づいた。また、この体勢だと、相手と正対できる。当時は「亀」の全盛時代だったが、敵に背を晒す「亀」は本能的に嫌だったので、自分自身の「禁じ手」にしていた。常に相手と「正対」する。それが鶴田先輩の寝技でもあった。そして、機会があれば攻撃に転ずる。それが、左足裏で下から相手を持ち上げる「起重機」だった。そして、相手と体が離れないようにしながら、「起重機」で相手を持ち上げつつ転倒させ、そのまま今度はこちらが上になって、攻守所を変えて、上からの攻めに転じる。この常に攻撃に転じうる刃をもっている威嚇力が、この寝技の形の要諦だった。3年になる頃、足を利かすことの重要性に気づく。私の寝技の形において、足（脚）は、次の様に使った。右足裏は相手の向って右脇の下あたりに突っ込む様に押しつけ、左足裏は相手の

向って左の股から腰あたりに押しあてて、両手とあわせて、相手を雁字搦めに固定することをめざす。また、この体勢では、左足のウェイトは大きくなく、左足を利かしていなくても、自分の体勢はすぐには崩れないので、左足は機を見て攻撃の武器に使う。それが起重機であり、また、相手が重心を置いている方の足（脚）を強烈に蹴って、相手の体勢を崩し、素早く上から攻めにいく。更に、膝を乗り越えて攻め上ってくる相手には、足（脚）を利かして押し返し、正対する体勢に戻す。脚の力の威力は誠に大きい。

3年の春には、私の寝技の原型は出来つつあった。しかし、未だ全く不完全だった。3年の6月の京大戦では、京大4年の亀谷選手に押え込まれてしまった。しかし、必死で逃げて、29秒で寝技は解けて、そのまま試合終了となり、一本勝ちのみの七大戦ルールのため、引分けに持ち込めた。この試合は、ネバー・ギブ・アッパー大きな自信となった。

#### 4、牛島辰熊師の言葉

3年の七大戦の後の夏休みに、我々が最上級学年となって、20人を率いて、山陽・四国・九州遠征をした。10日間の連戦で、全員が日々逞しく成長していくのを実感できた。そして、北九州の八幡製鉄（現新日鉄住金）での試合の後、寝技の巨匠、牛島辰熊師のお話をうかがうことが出来た。牛島師は、寝技は、「ゴムまりと板との戦い」だと述べた。板は、一点を押えれば、相手を制することが出来る。しかし、丸いゴムまりは、動きを封じることが出来ない。寝技で守る時は、いかにしてゴムまりになるか、寝技で攻めるといことは、いかにしてゴムまりを解いて板にするかということだと。必死に寝技を追求していた私にとって、極めて含蓄の多く深い言葉だった。

#### 5、「寝技の体」をつくる

3年秋になり、柔道部生活も残り1年を切った。どうしたら、鉄壁の守りを完成出来るか一とに角、出来ることは、引きつける力を強くし、かつ、攻め上ってくる相手を足で押ししかえす足腰の柔らかさとバネを強くすることだと考えた。当時、マネージャーをしていたので、運動会の総務と交渉して、七徳堂にバーベル器具一式を導入した。そして、引きつける力を強化するのに一番有効なのは、「カール」だと考え、毎日、稽古が終ってから1時間、ウェイトリフティング、就中、カールの特訓をした。初めは、30kgを連続7回するのが精一杯だったが、半年後には、70kg・7回を普通にこなせるようになった。足腰を柔らかくかつバネを強くするにはどうしたらよいか。これは、走り込むことだと考え、毎日、1万mを走ることにした。これは、寝技に不可欠なスタミナの強化にも役立つ。1万mは御殿下グラウンドを約1時間かけて走った。毎日、稽古が終ってから、1時間はウェイトリフティングをし、その後、1時間、暗闇の御殿下グラウンドを一人で走った。そして寝る前に、足蹴り150回、腕立て伏せ100回を、日課として課した。これは、4年の7月まで、合宿の期間中以外は原則として毎日続けた。

#### 6、絶対に負けないという自負心と自己暗示

体が出来てくると、寝技も出来上って来た。正対して、右手で相手の左奥襟を掴んで引きつけ、かつ、左手で相手の左足裾を掴み、右足裏を相手の右脇の下あたりに押しつけ、

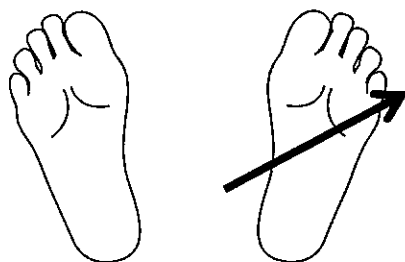
左足裏は相手の左股から腰あたりに押しあてて、相手を固定して正対し、隙あらば、左足裏でもって相手を起重機で持ち上げ、ひっくりかえして、上から攻める。毎日の稽古も、真剣勝負で、相手に絶対に足を越えさせない。そうやって、「俺の足を越えることが出来る奴はいないんだ！」と、毎日、自信を再確認し、自己暗示をかけつづけた。最後の踏んばりは、メンタルな部分が大きいのかもしれない。

その様な折、当時、神田にあった博報堂に勤務していた佐藤宣践選手（当時、中量級の世界チャンピオンで、寝技は世界一といわれた）が七徳堂に稽古に来られた。そして、全員の観戦している前で、私と寝技の稽古をして下さった。佐藤選手は、私の足を越えることは出来ず、遂に「立ってこい！」と叫んだ。46年前の光景が昨日の様に思い出される。

#### 7、崩れ横捨身

3年の秋の話に戻るが、防衛大との定期戦があった。これは講道館（立技）ルールでの試合だった。寝技しか出来ない私は、「引き込み」を2回注意され、警告となって敗退した。試合が終わった後、七徳堂に一人残り、無念の涙が止まらなかった。

実は、この3年の夏前頃から、立技ルールの試合でも、「引き込み」なしで寝技に持ち込める様にする為に、連続技を研究していた。それが、「崩れ横捨身」である。自然体で立っている時、相手は、左図の矢印の方向への抵抗力は非常に弱い。



右手で相手の向って左の奥襟をもって、相手の体勢を崩しながら、矢印の方向へ自分から飛び込む。相手は足でもって踏んばれず、遠心力で一回転し、そのまま押さえ込みを持ち込める。失敗しても、引込みにならず、下から攻めることが出来て、元々だ。

防衛大戦の後、この「崩れ横捨身」の完成を急いだ。そして、4年の春には、講道館の月並試合で使って、きっちりと決まり、即、押さえ込みを持ち込めて一本勝した。

#### 8、七大戦・京大戦

4年次の七大戦は、前年までは2連勝だったにも拘らず、この年は、東大は惨敗だった。その後の10年間位、「何故東大は負けたのか」と、折につけ自問自答していた。折りしも、東大紛争がぼっ発し、安田講堂事件で入試が中止となった年度だった。勉強する気にもなれず、5年次も柔道をした。その年の七大戦は札幌であった。決勝戦の相手は京大だった。宗岡主将（現新日鉄住金会長・全柔連会長）は、私を副将に起用してくれた。京大は、いつも置き大将作戦で来ており、キャプテンが副将で出てくるので、私がそれを



封じる役割だった。残念ながら、東大は、一人リードされた状態で、私の出番となり、京大の三将三村選手にあたった。起重機で持ち上げひっくり返して、「技有り」をとったが、三村選手が軽量だった為に起重機がききすぎて、体が離れてしまい、連続技で押さえ込みに持ちこめず、一本勝ちのみの七大戦ルールのため、引分けとなってしまった。東大は一人差で敗退した。非常に残念な思いをしたことが、昨日の様だ。最後に京大の田中修市選手のことをふれたい。5年生の時の京大戦で対戦した。田中選手は、私と同学年の京大のキャプテンで、この時は、共に5年生同士の対決だった。私は、いつもの通り、寝技で鉄壁の万全の「守り」の体勢をとった。ところが、田中選手は、軽々と私の足を越えてくる。体勢を立て直して、再度鉄壁の型で正対しても、又もや軽々と足を越えて来る。「あの佐藤宣踐選手も越えられなかったこの足だ」と心を奮い立たせて体勢を立て直しても、田中選手は、やはり軽々と私の足を越えてくるのだ。寝技の試合の途中で、「負けるかも知れない」という恐怖心をもったのは、この試合だけだった。最後は、自分には禁じ手として封印していた「亀」で逃げ切って、なんとか引分けに持ち込んだが、やはり、底知れない技倆をもった達人というものはいるものだ。その田中選手に、約30年後に一晚、一緒に酒を飲む機会があった。柔道をしていて本当によかったなという感慨に浸ることが出来た一夜だった。

#### 9、寝技の勝敗はいかにして決するのか

寝技に取り組みながら、頭を離れなかったのは、寝技の勝敗はいかにして決するのか、その基本原理は何かということだった。私の実感としては、寝技は、物理学の力学の法則が単純明快に適用される、非常に理論的なスポーツだということだ。だからこそ、旧制高校で熱心に取り組みされた所以であろう。では、その勝敗を決する基本原理は何か。それは、「勝敗は一点（勝負が決まる重要ポイント）に集中する力の多寡で決まる。相手の3倍の力を集中できれば、勝負は決まる。」2倍までだと、相手の頑張りや踏んばりが奏功することがあるのだ。そして、相手の3倍の力を一点に集中する為に、両手・両足・脚・頭・場合によっては「顎」等、全身のあらゆる所を使う。

この一点集中三倍理論は、4年の現役時代に臆げながら形成されつつあったが、明確に認識できたのは、4年の冬休みだった。その詳細については、紙面の都合上、別の機会に譲るが、私には、「戦い」において勝敗を決する基本原理としての普遍性を有するように思える。そして、この理論は、その後に私の職業となった弁護士業務を遂行する上で、係争処理における私の基本原理となった。

#### 10、振り返って

私の場合、2年で寝技のセオリーに気づき、3年で体をつくり、4年で自分の寝技を完成した。しかし、3年で自分の寝技を完成出来ておれば、もっと充実した柔道部生活だったと思う。そして、それは決して不可能でない。即ち、1年目に寝技のセオリーを自覚させ、2年までに体をつくれれば、必ずや3年で己の寝技を完成出来る筈だ。正に、旧制高校の柔道部はそうようにしていたのではないか。しっかりした教育・育成システムの必要性

を痛感する。

#### 11、おわりに

柔道部で鍛えられた気力・体力・集中力、そして、体得できた勝敗の基本原理は、そのお陰で、その翌年（昭和46年）、司法試験に一発で合格でき、また、その後の人生における私の行動の原点であり原動力であり行動原理となった。実は、妻も柔道部の縁で会うことが出来たのです。柔道部への感謝の念でもって、この小文を締めくくりたい。